

巻 頭 言

東京女子医科大学医学部内科学（第三）

イワモト ヤスヒコ
岩本 安彦

本号は、私の医学部内科学（第三）講座主任教授/糖尿病センター糖尿病・代謝内科診療部長の定年退職を記念して、東京女子医科大学雑誌の臨時増刊号として発行させていただいた論文集である。2011年3月末をもって、15年間に亘って務めた本学教授の定年を迎えることは認識していたが、増刊号の発行を編集委員長の泉二教授からお薦めいただいたのは、かなり押し迫ってからのことであった。幸いに教室員の賛同を得て、総説、原著論文、症例報告として35編の論文を執筆いただき、論文集としてまとめることができた。この間、教育・診療・研究に多忙な中、執筆いただいた多くの教室員、また短期間で論文の査読をお願いした学会の先生方ならびに学会室の方々にこの場をお借りして心から厚く御礼申し上げる。

糖尿病を中心とした本学第三内科学教室の伝統は、故中山光重教授（在職：1954年～1966年）、故小坂樹徳教授（在職：1966年～1972年）が主宰された第二内科に流れを汲み、その後、総合内科（鎮目和夫教授）時代の1975年に、平田幸正先生をお迎えして糖尿病センターが設立された。1978年には、糖尿病センター代謝内科を診療単位とする第三内科学講座が誕生し、平田先生が初代主任教授に就任された。

糖尿病センターは、開設以来今日まで36年間に亘って、「糖尿病があっても糖尿病をもたない人と同じ人生が送れるように医療の手をさしのべる」ことを目指して、糖尿病眼科の併設、妊娠外来開設、小児糖尿病外来開設（のちに小児部門へ発展）、透析室併設、フットケア外来開設など、次々に拡大・発展を遂げてきた。1997年に第二代主任教授大森安恵先生から引き継いだ私は、わが国で唯一というべきユニークな診療体制を維持・発展させるよう努力したつもりである。今では、学内外の多大なご支援を得て糖尿病患者の初期治療から、さまざまな合併症に苦しむ患者の治療まで、トータルケアを目指す診療体制を確立し、約20,000人の糖尿病患者が定期的に通院する世界でも最大規模の糖尿病センターに成長した。

本号には、糖尿病センターの研究グループ、診療グループにおいてこれまで行ってきた主として臨床研究の成果の一端をまとめて報告させていただいた。

泉二編集委員長をはじめ多くの先生方、学会室の方々、そして企画の段階から発刊まで教室員を鼓舞していただいた佐倉医局長と多大な支援をいただいた秘書の猪狩さんにあらためて深く感謝申し上げます。

2011年3月